

第 IV 部門

城跡内における動物園整備の経緯及び現況に関する研究

近畿大学理工学部社会環境工学科 学生員 ○中野 海斗
近畿大学理工学部社会環境工学科 正会員 岡田 昌彰

1. 研究の背景と目的

動物園は身近な娯楽施設として各地に分布しているが、城跡の立地については近年さまざまな議論が展開されている。老朽化に加え、城跡なる文化遺産に不相応な施設として閉園・移転が相次ぐ一方、その歴史的意義も再考されている。本研究では国内における8事例を対象とし、関連史料及び現地調査によってそれぞれの経緯と現況、ならびに社会的位置づけの変遷を明確化することを目的とする。

2. 城跡における動物園整備の経緯

(1) 廃城令後から戦前における城跡利用

1873年の廃城令発令後、城跡は各自治体や民間に払い下げられ、公共の場として市民に開放された。以降、教育施設や官公庁、公園施設等、必ずしも旧来の城跡のコンテクストに合致しない建築物が整備されていく。公園として整備された城跡において、動物園は児童の情操教育や娯楽施設の場として位置づけられた。

和歌山城跡や小諸城跡、岡崎城跡など、多く城跡の近代公園化に関わってきたのが、日本の近代造園の先駆者、本多清六（1866-1952：図-1）である。「日本の公園の父」とも呼ばれた本多は、日比谷公園をはじめ数多くの近代公園の設計・改良設計に携わり、造園・林学の分野において日本の近代化を支えた。



図-1 本多清六（1866-1952）

1915年の和歌山城跡整備において、本多は枡形の撤去や濠の埋め立て等、城跡本来の特徴的施設の解体を含む設計案を打ち出すが、地元の反発を受けている。一方、1937年の小諸城跡拡張計画では一転、現状保存を旨とする提案を行った。結果として前者では本多案、後者（並びに松江城跡）では本多案よりもむしろ市民の要望によって動物園が整備されたことがわかった。

なお、動物園の概念は1862年の遣欧使節団による欧州視察によってもたらされたと言われている。その一員であった福沢諭吉（1834-1901）は、西洋諸国の制

度や文化を記した著書『西洋事情』（1866）の中で「動物園」に言及している。また、1882年開園の日本初となる近代動物園、上野動物園について政治学者・渡辺は「明治政府の殖産興政策の一環」としての位置づけを示している²⁾。本多が活躍した明治末期～昭和初期において、動物園は近代化の象徴的施設の一つとして位置づけられていたことが伺える。

(2) 戦後から現代における城跡利用

1958年の和歌山城（図-2）等、1950年以降天守閣が各地で復元・復興され、観光施設やランドマークとしての位置づけが強化される。また、



図-2 和歌山城天守閣

1969年に策定された「特別史跡姫路城跡整備管理方針」によって裁判所、税務署、市役所等の新規公共施設が移転された姫路城等、1980年頃より史跡や名勝の指定を受けた各城跡においてその保存・活用を目的とした計画が策定される。これ以降、文化財保護法第百二十五条により史実に基づいた近世建造物の復元が行われ、一方で明治以降に城跡に建造された新規公共施設などは「史跡に不相応」と位置づけられるに至った。

動物園も同様の扱いを受け、その撤去・移転の方針を盛り込んだ計画が1980～90年代に策定されていくことが明らかとなった。現在もこの方針に従って動物園の閉園・移転計画が進められており、その維持や再整備は小諸城跡と高岡城跡のみで計画されていることがわかった。

3. 動物園の現況と史跡整備

現在の動物園は「閉園・移転済」、「閉園・移転予定」、及び「維持・再整備予定」の3種に分類される。なお、「閉園・移転予定」には計画が具体化されていない事例も含まれている。

(1) 閉園・移転済

津山城跡、丸亀城跡はそれ



図-3 亀山動物園跡の石碑

ぞれ 1963 年, 1953 年に国の史跡指定を受けている。その後史跡整備による史跡内占有物の撤去方針に基づき, 城跡内に立地していた鶴山動物園, 亀山動物園が 2011 年, 2007 年に閉園となった。両者共に獣舎等の設備は全て撤去され, 後者では石碑を残すのみとなっていることがわかった (図-3)。

一方, 岡崎市の岡崎東公園動物園は元々約 3 km 西の岡崎公園内 (岡崎城郭跡地) に 1957 年に整備されたものであったが, 1982 年の「三河武士のやかた家康館」建設に伴い現在地に移転している。すなわち, 徳川家康に代表される近世史を重視した再整備の思想がここにも読み取れるが, 同時にその背景には中根鎮夫市長 (当時) による動物園の規模拡大方策「世界家畜構想」があったことがヒアリング調査により明らかとなった。

(2) 閉園・移転予定

1950 年開園の小田原動物園は 1993 年に小田原市が策定した「史跡小田原城跡本丸・二の丸整備基本構想」に



図-4 小田原動物園の猿舎

において史跡に不相応な施設と位置づけられ, 猿舎以外は全て撤去された (図-4)。現存のニホンザルが死亡あるいは移転次第閉園する予定であることがわかった。

同様に姫路市立動物園, 和歌山城公園動物園にも移転計画があるが, 前者には具体策検討計画があるも 2020 年 2 月現在いずれも具体化はされていない。一方, 後者では 1995 年に和歌山市が動物園移転を含んだ整備計画を策定するが, 翻って 20 年後の 2015 年に尾花正啓市長は「(動物園を) 城の歴史の一つとして残し, まちづくりや観光に活用」すべく動物園移転計画の見直しを開始した。今後, 動物園のあり方について長期

的な議論を行うとしており, 動物園の歴史に関するパネルを設置するなど, 動物園の歴史的意義を再考し市民の関心を引き出す取り組みが行われていることが明らかとなった。

(3) 維持・再整備予定



図-5 小諸市動物園

高岡市の高岡古城公園動物園では動物園を維持, 小諸市動物園 (図-5) では動物園の再整備が予定されていることがわかった。いずれも史跡・名勝指定は 2015 年以降となっている。なお, 後者では動物園が指定区域外である一方, 100 年を超える歴史性を再評価する意見や市民の存続要望も多いことがわかった。

4. 結語

明治以降, 公共空間として開放された城跡内には動物園を含めた様々な新規公共施設が加えられたが, その後近世の歴史的空間としての城跡の意義が見直され, さらに 1980 年頃からは史跡に不相応な施設として動物園や新規公共施設は撤去対象となった。一方, 2010 年以降における城跡整備においては動物園にも歴史的意義が見出され, 市民の憩いの場としての機能も見直される。動物園の存続や再整備が計画されるなど, 多様な価値観が生起していることが明らかとなった。

参考文献

- 1) 大山僚介 (2016) 「史跡和歌山城における公園整備 一本多静六と森蘊の整備を中心として」, 『近世城跡の近現代 平成 28 年度 遺跡整備・活用研究集会報告書』, pp.185-192, 奈良文化財研究所
- 2) 渡辺守雄 (2000) 動物園というメディア, 青弓社

表-1 城跡における動物園の現況と史跡整備

	和歌山城公園動物園 (和歌山市)	小諸市動物園 (小諸市)	小田原動物園 (小田原市)	高岡古城公園動物園 (高岡市)	姫路市立動物園 (姫路市)	亀山動物園 (丸亀市)	鶴山動物園 (津山市)	岡崎市東公園動物園 (岡崎市)
城	和歌山城	小諸城	小田原城	高岡古城	姫路城	丸亀城	津山城	岡崎城
開園	1915	1926	1950	1951	1951	1952	1955	1957
天守閣	外観復元天守 (1958)		復興天守 (1960)		現存天守 (1609)	現存天守 (1660)		復興天守 (1959)
移転・ リニューアル	リニューアル (1970)			城内移転・ リニューアル (1960)				城外移転 (1980)
現状	移転予定 (長期的な議論・ 検討)	改修予定	閉園予定	現状維持	移転予定	閉園 (2009)	閉園 (2011)	移転済み (1980)
史跡の文化財指定	国史跡指定 (1931)	市名勝指定 (2019) (動物園は範囲 外)	国史跡指定 (1938)	国史跡指定 (2015)	国特別史跡指定 (1956)	国史跡指定 (1953)	国史跡指定 (1963)	市史跡指定 (1962)
移転計画	史跡和歌山城整備計画 (1995)		史跡小田原城本丸・ 二の丸整備基本構想 (1993)		姫路城整備基本構想 (1986)	史跡丸亀城管理事業 (1990)	史跡津山城保存整 備基本計画 (1998)	